

共同研究を終えて

濱田耕策

「研究を終えて」なにか所感を述べよ、となったが、この2年半余の間、本務の上に本委員会の務めが加わり、真に多忙であった。2ヶ月に1回の頻度で研究会を進めたが、それは直ぐさまのことである。

さらに、日韓の歴史、しかも関係史を対象とするから、その理解の根底に歩みよれない広い距離があることを思い知らされた。関係史の理解はそれぞれの国家と文化の認識に連なるが故に、それぞれに彼我に關係史の理があることが説かれることになるのである。

この間、議論のなかで文化摩擦を覚えることしばしばであった。関係史についてその歴史認識を関係の2国間で共通にすることの遥かに困難であることを実感させられた。それが獲得されるには長い年月を要しようし、それが何らかの強制力が働いたのであれば不幸である。個人のテーマの研究に没頭できる幸福を噛みしめることになった。

ところで、日韓の關係史研究の対象は第1・2期を通して国家の關係史を主たる研究対象としている。共同研究であるから、何かと制約も生まれる。日韓共同という枠から生まれるマイナス面のひとつでもある。もっと自由に、対象を豊かに設定できる条件が整うことを期待したい。その為にもそれぞれの分野で成果をあげなければならない。

そうは言っても、私はこのなかで「古代の日韓關係はどのように誕生したのか」また、「古代朝鮮社会の固有な文化とはなにか、それはどのような過程で誕生し、拡張したのか」について、考察を進めるヒントをすこし得たように思う。

会を終えて、この間の調査を活かし、この問題をまとめようと思っている。そのことで本報告論文の不備な点を補いたいと考えている。

さて、この間、韓流ブームはなお盛んである。このブームは日本からの訪韓を盛んにしている。慶州や扶餘を訪ねると、日本からのご高齢の旅行者によくお会いする。過ぎ去りし時を懐かしむ風でもある。遺跡訪問の後はソウルに向かわれ、現代韓国社会の渦を体感されるようである。30年来、韓国史の研究を通して訪韓してきた私は、韓国の激変と訪韓者の変化を実感するとともに、韓国の変わらぬ部分をも実感している。

一方、都内の山手線に乗車すれば韓国からの男女の学生をよく見かける。全国的にも観光と交通案内はハングル表記が付されている。日韓間の人の往来は史上最高期が続いている。このなかで歴史の相互認識が適切な価値を持って活かされるように、一人の朝鮮古代史研究者として微々たる能力ではあるが、務めを果たしたいと思う。

第2期韓日歴史共同研究委員会古代史分科会活動を整理して

趙法鍾

韓日歴史共同研究委員会第2期古代史分科会の委員として、過去2年6ヶ月の活動は、「韓日歴史学界の争点について、包括的な理解を基に持続的な対話と交流を通じて合意点を模索する活動」として、意義深く大きな意味がありました。また持続的な会議を通じ、お互いの立場や、認識の共通点と差異点を確認し今後の研究課題を導き出すことが出来た期間だったと思います。韓日両国の学界では既存の色々な形式と方法をもって多様な主題に関して学術会議と研究作業が進められ、これは特定主題についての集中的研究として意味がありましたが、短期間に進められたり分野が制限的な場合が大部分であり体系的な研究成果を出すのは難しいものでした。

しかし韓日歴史共同研究委員会は、両国の専門家が2年以上の間、研究を深め体系化できたという点でこのような既存の断続的な研究方式の限界を克服できました。特に第2期共同委員会古代史分科会では、韓日間の先史および古代史に表れた関係史から特定主題を中心に、関連研究と学界の立場を整理し、両国学界の共通認識と違いを把握し、相互の立場を尊重しながら今後の研究課題を導き出したという点で重要な活動だったと思います。特に、両国が自国史中心の歴史理解と論理を根拠に大衆的歴史理解を推進している現象は、簡単には克服されにくいですが、持続的な学術論議と歴史現場確認を通じた研究の深化と共有を通じて、相互の隙間を狭められたという点で両国歴史学界の交流と疎通のために重要な進展をしたと思います。

一方、今後韓日歴史共同研究委員会の活動は、次のような部分への考慮が必要だと思います。まず、先史および古代初期両国交流史で文献史的理解とともに、先史時代以来の考古学的研究成果と内容が体系的に検討される必要があると思います。両国考古学界の研究内容は、相当部分一致しているにもかかわらず、これを文献史学界と共有し大衆的な理解の内容へ表現するには不十分さを呈しています。この部分について、韓国の概説書や教科書では、韓国の青銅器・鉄器文化および農耕文化と日本の弥生文化との関係性を説明する部分が相対的に不十分で、日本側の言及は先史時期韓日関係についての具体的な事実紹介が省略されたり、概括的に言及されているのを確認できました。これは今後、古代史時代に活発に展開された韓日交流様相を体系的で、脈絡的に理解するのに難しさを伴っています。したがって今後の研究のためには、このような考古学分野において、さらに専門化された研究論議と紹介が並行されなければならないと思います。

一方、歴史研究と歴史教育は、緊密に連結されるべきだと考えます。今回の研究活動を通じて韓日両国学界の研究成果が大衆的歴史教育の現場へ適切に連結していない事例を見ることができました。今後両国の歴史研究と歴史教育が体系的に連結されうる方法と関連書籍についての補完方法についての模索も一緒に進められればと思っています。

このような、さらに発展された研究活動は、韓日両国の交流と協力のための歴史的成果物として韓日両国の歴史学界の疎通と理解だけでなく、両国の発展および東アジアの新しい協力のための新しい共同体構成の踏み石として大きな意味を準備すると思います。

最後に古代史分科会の委員の方々の深い研究と学問的成果は、本人に大きい刺激と勉強になり、

今後、私自身の深みのある研究成果を成し遂げるのに大きな助けとなったことを感謝いたします。

共同研究を終えての所感

森公章

今回の日韓歴史共同研究では私は「古代王権の成長と日韓関係」のうちの第2章「5世紀の日韓関係」と第3章「6世紀の日韓関係」、「古代東アジア国際秩序の再編と日韓関係」のうち第1章「7世紀の日韓関係」を担当した。このなかで例えば5・6世紀の日韓関係で中心課題になる「任那日本府」については、両国の基本的理解の基盤は形成されてきていると思われるが、細部では両国それぞれの国史の視点に由来する差異も存する。他の論点に関しても、今後はさらに史料解釈の突き合わせを行いながら、整合的理解を確立することが望まれるところである。

これらの時代に関連しては、全羅南道の前方後円墳、加耶諸国の発掘、6世紀の百済の王都や弥勒寺・王興寺などの寺院等々、特に韓国側の近年の考古学的知見の増加は新たな考察材料を呈するものとして注目される。出土文字資料については日本でも7世紀の木簡が多数検出されるようになったが、韓国ではまだ全体の数は少ないものの、6世紀の百済・新羅木簡が出土しており、古代王権の確立に関わる統治制度や事務運営の方法などの継受の有無を探ることが期待できる。

今回の共同研究ではこうした諸資・史料の実見や遺跡の見学を行うことができ、考古学的知見に依存する部分も多い当該期の様相を理解する上で有意義であった。両国の文献史学の研究成果ともども、こうした古代史学に関わる情報を共有する必要性、そのためのシステム構築や翻訳体制の確立も、今後の研究環境整備には不可欠の課題となろう。なお、日本でも各地から加耶系土器や韓式土器が出土しており、当該期の日韓関係の実相を解明するには、国家間だけでなく、地域間交流の視点にも目配りすることが重要であると思われる。

最後に個人的な課題としては、日韓古代史研究には漢文史料という共通素材があるが、やはり相互の日常的意志疎通には言語の問題が大きいと感じた。今までにも何度かハンゲルの勉強を試みたことがあるが、現在は「50の手習い」で、韓国語を習得するのはさらに困難になり、この間の多忙さを理由に今回も未習に終わったのは残念である。通訳を介してではあるが、韓国側委員の3先生や各地でお世話になった方々と交流できた体験には得るところが大きく、今後の国際的共同研究や国際交流でも役立てていきたいと思う。

第2期は〔第1期から〕多くの委員が入れ替わり、第1分科会の研究をどのように変えなければならないか悩んだのは数日前のこのようだが、すでに2年もの研究期間が終わり、これを顧みると月日の流れの早さが恨めしい。

古代韓日関係史の4～6世紀は韓半島および日本列島に布陣したさまざまな勢力の王権が急激に成長する発展期に該当する。そのため多様な共通現象も現れるが、地理的位置と歴史的背景および社会的成長度または現存する編纂書の叙述内容にともなう違いも見出すことができる。

韓日両地域の古代王権成長を研究して、新羅と大和の発展過程と水準に類似点が多く加耶と九州の運命にも共通性があるという印象を受けた。表面的なもののみ指摘するならば、5世紀に新羅と大和が自らの地域で排他的な王権を確立させ6世紀には既存の交易を先導した勢力だった加耶と九州地域が没落して、7世紀に新羅と大和が全国的な王権を再構成するという点があげられる。

それに比べ高句麗と百済は早くから中国と交流または競争しながら、先に発展し1～3世紀に古代国家を成立させ、4世紀には中央集権的な支配体制を確立し、新羅と加耶および日本列島の諸勢力に比べ圧倒的な先進性を具現していた。高句麗と百済の二強は4～6世紀にかけて、韓半島情勢を主導し、新羅と加耶の二弱は形勢により彼らに導かれた。倭は韓半島情勢の影響を受け、伝統的に親交の深かった加耶または百済に誘導されたが、一方では四国分立状態の恩恵を受けていた。

古代日本列島の王権成長の過程は、地理的に海によって隔絶されており、中国からの影響が間接的に及ぶという点で、韓半島のそれとは根本的に異なっているのではないかと考えられる。それにもかかわらず、各地域別に別の王権が成長しそれらの違いが再統合される過程を経ず、成長が不十分でも早くから全国的な王権が成立し日本列島を代表するように見られるのは日本的な特性だ。

今後の古代韓日関係史はいわゆる‘任那日本府説’の問題から脱皮し、韓半島と日本列島間の交流の性格および王権の成長過程の比較などを追求しなければならぬと考えるが、今回の共同研究では所期の成果を成し遂げられなかった。‘任那問題を含んで’という副題を付けたのはそのような本質に達し得ず、まだ研究の余地があることを弁明するためのものでもあり、今回の共同研究の基本目的を勘案したものだ。

韓日研究委員はこれまで少なくとも2ヶ月に1度ずつ合同分科会を17回開催し、第1分科会委員の間で会うたびに親交を深められた点は望ましかった。互いに言葉があまり通じず公式的な集まりが主となったため人間的な理解を深めることができなかつた点は残念だが、日本側委員の研究能力や姿勢に対して信頼と共感を抱くことができた。ただし研究環境の側面から見ると、今回の共同研究は第1期に比べて、分科会および研究者個人の所信ある表現が、全体の要求であるという名のもと多分に抑制されていた気がする。韓日歴史共同研究委員会が第2期で終わることなく、今後はもう少し自由な雰囲気の中で韓日間歴史認識の相互理解を深めることができるよう期待している。

所感

坂上康俊

第二期日韓歴史共同研究委員会に加わったの所感は、概ね座談会の場で述べておいたので、ここでは若干補足めいたことを記してみよう。

今回の共同研究においては、個別のテーマについての論文を執筆するというスタイルではなく、日韓両国における古代交流史研究の現段階について、過不足無くまとめることに主眼を置いた。今回のようなテーマの決め方をした以上、最も無理が少ない方法で、効率よく役に立つ成果を挙げ得たのではないかと思う。テーマが決まってから人が選ばれるのではなく、まず人が決まってからテーマを決めるという方法を採用し、しかも共同研究と銘打つ以上共通のテーマを立てなければならないとなれば、研究史の蓄積が並大抵のものでない以上、テーマが決まってからはたかだか二年に満たない程度の研究で、研究史を画するような論文が生まれることは、宿案があってそれが皆の認めるテーマに選定されるか、もしくはよほどの幸運に恵まれなければ、まずは望み得ないこととしなければならない。我々のとった方法は、与えられた条件の中では、最善のものではなかっただろうか。もちろん研究の現段階をまとめるとは言っても、盛り込めなかった分野は残った。個人的に挙げることを許されるならば、第一は渡来人の問題であり、第二は時代区分とその指標の問題である。いずれも今後の課題ということになる。

今回の研究期間のうちに、日本の首相は四人目を数え、韓国の大統領も替わり、日韓双方で「政権交替」が生じたのは奇遇とすべきであろうか。こうした背景にもかかわらず、わが第二期委員会第一分科会が、まずは順調に職務を全うしえたことは、両国の委員長、幹事の諸先生方及び支援組織のご努力によるところが大であるが、一方でアカデミズムの成熟とも評価できるように思う。韓国における木簡の出土事例が増加し、これを承けて韓国木簡学会の創立が見られた。こういった動きは、考古学的分野のみならず文献史学の方面においても日韓の学術的な交流の日常化をもたらしつつある。この潮流は今後ますます盛んになっていくだろうし、統一新羅期の文字資料がもう少し増えれば、日韓古代国家の様相を具体的に比較しあうことも可能となろう。そういった日を遠からず迎えることができることを祈念する。

所感

盧泰敦

韓日歴史共同研究委員会第2期を終え、まず感じたのは安堵感だ。自由な一個人として韓日間の共同研究に参加するのは異なり、両国を代表する公式的な機構の委員として活動するという事実がもたらす圧迫感が一定に作用する中、第二期委員会が出帆してすぐに研究テーマの選定をめぐる摩擦にぶつかった。4つの分科会から構成された委員会は2年間という期間で作業しなければならない制限的な機構だった。このような客観的な条件下で委員会が遂行しなければならない研究テーマとその論及の範囲に関する論難が長い間展開された。果たして委員会の事業がまともに遂行できるだろうかとたまに懐疑された。そのような中、第1分科会では大きな問題もなく、共同研究テーマの設定が比較的早く合意され、さらにその結果物を提出することもできた。古代史分科に属した韓日委員の間での相互に対する信頼と尊重がこれを可能にしたのだ。

そして、安堵感に続いて物足りなさを感じた。たとえ表向きには期間内に作業を無事に終え、与えられた業務を忠実に遂行したかと自問してみると、何か物足りなさが残る。今回は韓日両国の史学界における理解の違いという大きな問題を研究テーマとした。そのため共同研究または両側学界の既存研究成果を深く考察し意見の違いを狭めていく形をとり、自然とテーマ設定と研究進行は政治史が中心になった。今後はその研究範囲を社会史と文化史から拡大しなければならず、学界の既存の歴史認識の枠組みを越え、これを先導する視覚を提示することが必要だ。東北亜細亜地域史という観点を積極的に考え、韓日共同の古代史体系の樹立の方向を摸索することもその一例となりえる。今後またこのような共同研究の機会があれば、この第2期の経験を踏まえより良い方向を摸索されることを期待している。

これまでの2年間、私は多くのことを得た。特に、両国を行き来して行った遺蹟踏査は印象的だった。南は沖縄から北は仙台にまで、日本のさまざまな地域の遺蹟と風土を直接見て感じるができる機会を持てたことは幸運だった。それまで文字を通じて理解してきたこととは異なった新しい感覚が与えられた。このような生の体験は日本の歴史と文化を理解するところ多いに役立った。今後このような経験をすることができる機会を成長していく韓日両国の若い史学徒たちに準備することができる方案の摸索が、両国歴史学界における相互理解の増進にたいへん重要だということを新たにそして切実に感じられた。